

『好色一代女』における「二項対立」構造の再検討

日比野 洋 文

はじめに

『好色一代女』（貞享三年〔二六八六〕年刊^①）は、論者によって異なる読みが試みられてきた作品である。暉峻康隆氏は、主人公を弱者と捉え、「この作品における西鶴の第一のテーマは、商品化されざるをえない女の性の悲劇を告発するというにある」と読み解いた。一方、谷脇理史氏は「美女」一代女は、平然とたくましく、時には「命を断つ斧」であることを自負するかのごとくに生き続けていく」と主人公を強者と捉え、作品を喜劇と読み解いた。

悲劇と喜劇という相反する読みが注目される中で、長尾三知生氏は『好色一代女』を「性の過剰」と「性の欠如」という二つのモチーフが対立する世界と捉えた（氏は「二項対立」と述べる）。さらに氏は、一つのエピソードが

主人公の追放によって締めくくられることに注目し、「《欠如》《過剰》《追放》というモチーフはそのいずれもが、安定した秩序を脅かす不安定要素を持っている」と述べ、「主人公の人生は、いわば文化秩序、日常生活の破壊者として、定着を拒否され日常的秩序の世界から追放されなければならない人生である」と読み解いた。

森耕一氏⁽⁵⁾は、長尾氏の研究成果を「画期的な発想」と評価しつつも、「過剰」と「欠如」は、人物と人物との組み合わせを変えることによって無限に互換し得る概念であり、あくまで相対的な概念でしかない」と指摘し、二項対立の主体を前出の谷脇理氏が着目した男女の対立と想定して分析を進めた。その結果、多出する男女の対立の構図に「女優位・男優位の性差による固定した力関係・階層的秩序は存在しない」ことを確認し、終章（巻六の四）の主人公が五百羅漢像にかつて関係を持った男たちの面影を見出し、彼らの死という現実を認識する場面において、「男女の対立関係と力による階層的秩序」の「解体と解消」を指摘した。そして直後の主人公が命を絶とうとするも、引き留められるという展開を通して「ここに加害・被害の二つの性による対立と、その反復による性差の消失、そして、その先にある融和のモメントを読み取るべきであろう」と指摘した。

森氏の研究によって、二項対立の世界という作品理解は、説得力を増したものと筆者は考える。しかし、依然万全でないとも思う。それは、氏が当該論考初出時に述べていた次のことにある。

ただし、『一代女』は対立から融和への物語ではなく、女優位・男優位の話が並列されていたように、ただ単に、対立と融和の物語が並列されているだけである。

氏は、「並列」の構図に特段の意味を見出していないようである。この氏の言は、長尾氏の「多く散在する二項対

立が、それぞれにコノテーション（伴示の意味）の響き合いを生み、作品を豊かなものにしていく」という指摘と相違するものである。

筆者も『好色一代女』が、主人公の「悲劇」もしくは「喜劇」の物語として読まれてきた中で、「二項対立」の世界という作品理解は、「画期的」であると思う。しかし、「対立と融和の物語」（二項対立）が、「並列されているだけ」であるとすると、西鶴の本書における主張は何であるのだろうか。二項対立の世界という作品理解には、それが結局、何を映し出すのかということに、今なお検討の余地が残されていると思う。

また、広嶋進氏は『好色一代女』が悲劇、喜劇の一方を描いた作品ではないと指摘する。氏は、「第一部 少女期」（巻一の一から三）と、「第三部 奉公人期」（巻二の三から巻四の四）を「奔放Ⅱ明」、「第二部 公娼期」（巻一の四から巻二の二）、「第四部 私娼期」（巻五の一から巻六の三）、「第五部 終章」（巻六の四）を「悲哀Ⅱ暗」と読解し、「本作は、異質な職歴と異質な主人公の行動・心象が交互に出現するという構想を持つ作品」であると指摘する。さらに、次のようにも指摘する。

『一代女』は貞享期の女性諸職を主人公が遍歴していく作品なのであり、悲劇でもなければ、喜劇でもない。作者は主人公に職種と境遇にふさわしい「其時の心」と行動を取らせ、悲嘆させたり、大胆奔放な行動をさせたりしているにすぎないのである。

広嶋氏は、「異質な職歴と異質な主人公の行動・心象が交互に出現する」と指摘するが、その「二項対立」の概念にも通じるような構成に、特段の意味を見出していないようである。けれども、長尾氏が「コノテーション（伴

示的意味)の響き合いを生み、作品を豊かなものにしてゐる」と述べているように、交互に出現する主人公の非遊女期と遊女期にも、何らかの伴示的意味があるとは考えられないだろうか。

そこで本稿では、『好色一代女』における二項対立の構造が映し出すものを先学の研究成果を踏まえ明らかにする。その方法として、まず長尾氏が「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフを抽出した巻一の一の場面の意味と、「二項対立」の主体を今一度検討することから始める。そして、「二項対立」が主人公の回想において如何なる形で出現するのかを確認し、回想の終末における主人公の感情を手がかりに、それが映し出すものを明らかにしてみようと思う。

一 構想

巻一の一には、主人公一代女に過去の好色体験を語るよう求める二人の若者が登場する。長尾氏は彼らの存在意義を「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフの提出と捉えた。その二人が登場する場面は次のとおりである。

人の日のはじめ、都のにし、嵯峨に行事ありしに、春も今ぞと、花の口びるうごく梅津川を渡りし時、うつくしげなる当世男の采体しどけなく、色青さめて恋に貌をせめられ、行末頼みすくなく、追付親に跡やるべき人の願ひ、我方の事に、何の不足もなかりき。此川の流れのごとく、契水絶ずもあらまほしきといへば、友とせし人驚き、我は又、女のなき国もがな。其所に行て、閑居を極め、惜き身をながらへ、移り替れる世のさまざ

まを見る事もといふ。この二人生死各別のおもはく違ひ、人命短長の間、見果ぬ夢に歩み、現うつつに言葉をかはすがごとく（傍点日比野）

長尾氏は、二人の若者が語る性の永続の願望が、「全く現実への働きかけのないもの」であることを理由に、問題提起の意味はないと分析し、その存在意義を「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフの提出と捉えた。たしかに、前者の「契水絶ずもあらまほしき」という願望は、氏が指摘する「性の過剰」と言える。後者は「女のなき国もがな」、「惜き身をながらへ」といふ願望は、「性の欠如」であると言える。

しかし、二人の若者が抱く願望は、相反するものであるにせよ、長尾氏も「若者の価値観は、経済的物質的生活の満足よりも、性の満足を問題にする。性が優先している」と指摘するとおり、結局のところ差異はない。二人が抱く願望の性質は、「性の過剰」と「性の欠如」であるが、どちらも性の過剰な追求であることに違いはない。

また、右にも取り上げているが、当該場面には二人の若者が抱く願望（性の過剰・欠如⇨性の過剰な追求）を「生死各別のおもはく違ひ」と否定する観察者が存在する。

長尾氏は二人の若者に、「モチーフの提出」という存在意義を見出すが、一方で彼らの願望を否定する観察者については、存在意義を見出していないようである。しかしながら、観察者も二人の若者と同じく、作品のモチーフを提出する人物であると考えられる。それは、二人の若者の人物像と、観察者の発言内容が、その直前の冒頭の言辭と重複している。

美女は命を断斧と古人もいへり。心の花散、ゆふべの焼木となれるは、何れか是をのがれじ。されども時節の

外なる朝の嵐とは、色道におぼれ若死の人こそ愚なれ。其種はつきもせず。

二人の若者が性の永続の願望を語ると、観察者はそれを実現不可能であると否定するが、右のとおりその直前(冒頭)では何人たりとも老いを避けることができないにも関わらず、性を過剰に追い求め命を落とす若者が絶えないと主張する。したがって、二人の若者と観察者は、冒頭の主張を具体化した人物であると言える。

こうした冒頭の言辭と、二人の若者、並びに観察者の重複する主張には、奇をてらったところもなく、注目すべきようなところは見当たらない。しかし、その重複する主張は、冒頭とその直後という読者が作品の世界観に初めて触れる場所に集中して配置されている。つまり、長尾氏が二人の若者が語る願望を「実質的には何の問題提起にもならず」、「何の答をも要求しえない」ため、その存在意義を「モチーフの提出であると考えることが、最も妥当性を持つ」と指摘するように、重複する主張全体を「モチーフの提出」と見ることが妥当ではなからうか。作品のモチーフには、氏が指摘する「性の過剰」「性の欠如」(性の過剰な追求)に加えて、その否定(性の破綻の不可避・平等)という要素があるのである。

なお、詳細については後述するが、筆者の言う性の破綻の不可避・平等とは、性力の枯渇や死だけを意味するものではない。森氏が「序章にみられる女と男・老と若・強と弱・美と醜を対比する発想は、終章まで一貫している」と指摘するように、性の破綻の不可避・平等とは、対立関係の解消といったところを想定したものである。その破綻の平等を次に見てみる。

二 モチーフ

モチーフの一端である性の破綻の不可避・平等については、前述のとおり森氏が、終章の主人公が大雲寺の五百羅漢にかつて関係を持った男たちの面影を見出す場面において、その出現を指摘している。さらに、当該場面における主人公の発言からは、同じく作品のモチーフである性の過剰な追求を読み取ることができ、続く主人公が命を絶とうとするも救われる場面では、回想の核心が表示されている。

まず、主人公が五百羅漢像から、かつて関係を持った男たちの面影を見出す場面を見てみよう。

なを奥の岩組の上に、色のしろい仏貌、その美男、是もおもひ当りしは、四条の川原もの、さる芸子あがりの人なりしが、茶屋に勤めし折から、女房はじめに、我に掛り、さまざま所作をつくされ、間もなくたたまれ、挑灯の消るがごとく、廿四にて、鳥辺野にをくりしが、おとがいはそり、目は落入、それにうたがふべくはなし。又上髭ありて、赤みはしり、天窓はきんかなる人有。是は大黒になりてさいなまれし寺の長老さまに、あの髭なくば、取違ゆべし。なんぼの調謔にも身をなれしが、此御坊に昼夜おびやかされて、らうさいかたぎに成けるが、人間にはかぎりあり、其つよ蔵さまも、煙とはなり給ひし。(傍点日比野)

右の場面では、主人公と男性たちの過去の関係が、性力という観点から語られている。森氏は、右の場面に「弱蔵と強蔵が対のかたちで登場」することに注目し、その相反する性力の持ち主であった二人の男の末路について、

「死においては弱者も強者も平等」と指摘する。なお、長尾氏は、つよ蔵、よわ蔵について「まさしく「性の過剰」と「性の欠如」が直接体现されたものである」と指摘している。

一方、男たち（性の過剰と欠如）の死という現実を直視した主人公は、「一生の男、数、万人にあまり、身はひとつを今に、世に長生の恥なれや、浅ましや」と罪悪感にさいなまれる。この発言は、主人公が性を過剰なまでに追い求めてきたことに加え、その行き過ぎた行為の破綻を意味する。つまり、亡くなった男たち（性の過剰と欠如）と、性を過剰なまでに追い求めてきたことを恥じる、かつて性の強者（性の過剰）であり、弱者（性の欠如）でもあった主人公とは、性の過剰な追求（性の過剰と欠如）と、その否定（性の破綻の不可避・平等）のモチーフを可視化した存在であると言えよう。具体的に言えば、大雲寺の場面において思い出として語られる性の弱者「性の欠如」を相手にした主人公は、相対的に強者「性の過剰」ということになり、強者「性の過剰」を相手にした主人公は弱者「性の欠如」ということになる。

なお、先にも取り上げたが、森氏は、主人公が五百羅漢像から死んだ男たちの面影を見出す場面と、その後、自らも命を断とうとするが、寸前のところで救われるという展開に、「ここに加害・被害のふたつの性による対立と、その反復による性差の消失、そしてその先にある融和のモメントを読み取るべきであろう」と指摘する。筆者は、氏の見解に異論はない。しかし、主人公が命を救われる場面では、彼女が命を絶とうと決意するまでに自己の精神を追い詰めた原因が語られていることにも、注目すべきである。当該場面をまず見てみる。

むかしのよしみある人、引留て、かくまた、笹葺をしつらひ、死は時節にまかせ、今迄の虚偽、本心にかへつ

て、仏の道に入とすすめ、殊勝におもひ込、外なく念仏三昧に明暮の板戸を、稀なる人音づれにひかされて、酒は気を乱すのひとつなり。みじかき世とは覺へて、長物語のよしなや。

「むかしのよしみある人」は、主人公に仏道に入信することを進め、彼女の精神を死の淵から救い出す。その彼が主人公の過去において問題視するのは、「虚偽」である。この発言は、主人公の過去が欲心と偽りに満ちたものであり、結果としてそれが他者の性を破綻に追いやるとともに、自己の精神を死を決意するまでに追い詰めたことを意味する。つまり、「虚偽」の本質は、作品のモチーフの一つと述べた性の過剰な追求であって、助言はこうした行為との決別を促すものなのである。そして、回想の終末という場面において、「虚偽」と決別せよという助言を主人公は「殊勝におもひ込」み聞き入れている。これは主人公が語る回想の核心が、「虚偽」（性の過剰な追求）にあることを意味する。振り返れば、巻一の一に登場する二人の若者が望む性の永続が、現実にもしめないものであるように、彼らは「虚偽」のモチーフを提出する存在であったと言えるかもしれない。

そこで次節では、主人公の回想に出現する「虚偽」（性の過剰な追求）、「性の過剰」「性の欠如」と、その否定（性の破綻の不可避・平等）を見てみる。なお、本稿では、本節で見てきたように、対立する男女が相対的に「性の過剰」と「性の欠如」の概念を表示しているものとみて、二項対立構造の分析を進める。

三 モチーフの出現¹

「性の過剰」と「性の欠如」の二項対立を軸に作品の分析を進めた長尾氏は、主人公が登場する章を対象に、それが「好色風俗の紹介と職種の設定」と、「エピソードの定式（欠如―過剰―露呈―追放。またはその省略型）」によって構成されていると指摘する。筆者は、各章のエピソードに一定の型が存在するという氏の指摘に賛成である。しかし、氏の指摘する主人公を主体者と見た「エピソードの定式」に疑問がないわけではない。氏は、主人公の性欲が欠如から過剰への変化を指摘するが、森氏が「主体（誰を主体と相手するか、注日比野）によってこの二つの概念が逆転する」と指摘するように、その概念規定には混乱がみられる。「性の過剰」と「性の欠如」の概念は前節で確認したとおり、対立（相対）する男女に表示されていると見るべきである。また、「露呈」についても、氏は「しのぶ恋」（巻一の二）や「不倫の恋」（巻三の一）、「欠点を暴く」といった個々の行為を挙げておられるが、「追放」にも繋がるその概念の核については言及していない。つまるところ「エピソードの定式」には、検討の余地が残されている。

一方、二項対立の主体に男と女を想定して分析を進めた森氏は、先に取りあげたとおり、「女優位・男優位の性差による固定した階層的秩序は存在しない」ことを確認した。さらに別稿で、長尾氏の指摘する露呈の概念に加え、主人公による「暴露」のモチーフの存在も指摘している。⁽⁹⁾ けれど森氏も、男女の対立要因や、暴露の核については

言及していない。

もっとも、各章のエピソードにおける男女の対立要因とは、前節で確認した「虚偽」であり、長尾氏が「しのぶ恋」や「不倫の恋」といった行為を挙げる「露呈」とは、「虚偽」の「露呈」である。同様に、森氏が指摘する「暴露」も、「虚偽」の「暴露」である。それは西鶴が、『西鶴置土産』の自序で語る遊里における「虚偽」という行為の性質からしても明らかである。

世界の偽かたまつて、一つの美遊なれり。是をおもふに、真言をかたり揚屋に一日は暮がたし。女郎はなひ事をいへるを商売、男は金銀を費ながら気のつきぬるかざりごと

遊里は「偽かたまつて」造り上げられた世界であるという。主人公一代女も、巻一の四から巻二の二において遊女に身を落とすことから、「虚偽」とは他者に対して自己の性の有様を偽る行為を言ったものであり、これが作品世界における人物間の対立要因である。加えて、さきにも述べたとおり、本書の場合、「虚偽」には、性の過剰な追求の意が付随する。「しのぶ恋」や「不倫の恋」といった行為を想定する「露呈」についても、当該行為が周囲の人々に対して自己の性の有様を偽る行為であるように、その主体は、やはり「虚偽」である。かつ、その行為が社会において許されるものでないように、性の過剰な追求である。

現に、「不倫の恋」という主人公と内儀の対立のエピソードを内包する巻三の一では、「虚偽」（性の過剰な追求）と同義の「偽り」の言辭が出現し、長尾氏の指摘する「露呈」「追放」の概念との関連が明確に読み取れる。

去山伏を頼みて、てうぶくすれども、其甲斐なく、我と身を燃せしが、なを此事つりて、齒黒付たる口に、

から竹のやうじ遣て折れども、更にしるしもなかりき、かへつて其身に当り、いつとなく口ばしりて、そもそもよりの偽り、(虚偽)、残らず恥をふるひて申せば、亭主浮名たちて、年月のいたづら、一度にあらはれける、(露呈)。人たる人、嗜むべきは是ぞかし。それより狂ひ出て、けふは五條の橋におもてをさらし、(追放)(傍点・丸括弧日比野)

右の場面を念頭に置くと、各章のエピソードにおける人物間における「対立」の要因と、「追放」へと繋がる「露呈」・「暴露」の概念の主体は、ともに「虚偽」である。したがって、エピソードの定式は「虚偽」(性の過剰な追求・対立の発生)―「露呈」・「暴露」―「追放」であり、「虚偽」が二項対立の主体である。しかも、長尾氏は「追放」の概念について、「一つは、空間的な追放。ある場所から追い払うというものである。いま一つは、社会的空間における追放である。即ちある地位や職業から斥けられるというものである、(傍点日比野)」と述べている。氏の言う「追放」とは、破綻と換言可能であろうから、エピソードの定式とは、性の過剰な追求と、その否定のモチーフを可視化したものである。

そこで、右に述べたエピソードの定式を巻一の一、巻二の二、巻六の一をもとに観察しつつ、併せて「性の過剰」と「性の欠如」(破綻の平等)のモチーフの出現を見てみる。

○巻一の一

主人公は数多の「美男」に求められながらも、「其身はしたなくて、いやらしき」という「青侍」と密かに恋に落ちる。(虚偽・性の過剰な追求)

しかし、その恋は、「浮名の立事をやめがたく、ある朝ぼらけにあらはれ渡」り（露呈）、

主人公は「宇治橋の邊に追出され」、「青侍」は命を奪われる。（主人公追放、青侍死・性の破綻）

※恋を求める主人公と「青侍」の容姿に注目すると、主人公は「我自然と面子なよかにかにうまれ付し」や、「人まかせの髪結すがたも氣にいらず、つとなしのなげしまだ、隠しむすびの浮世もとゆひといふ事も、我改ての物好み」といった描写がある。一方、青侍は「其身はしたなくて、いやらしき」と語られている。恋の当事者が、容姿が美しく、さらにこだわりを持つ主人公と、容姿に美しさや、こだわりが感じられない青侍という相反する二人であるように、この設定は、性（容姿）の過剰と欠如のモチーフの出現と見るべきだろう。そして彼らが、性を追求した結果、主人公追放・青侍死という結末を迎えるように、性の破綻の不可避のモチーフも読み取れる。

○卷二の二・前半

困女郎へと位を下げた主人公は、「町の髪結」らしき無粋な客の相手をする。男は主人公に景氣のよいところを見せようと、「前巾着より、一步ひとつ、まめいた三拾日程、幾度か数読て見せける」。（遊客虚偽）

男の仕草に怒った主人公は、「俄に腹いたむ」と言い、ふて寝する。すると男は、夜明けまで主人公を看病する。その行為を氣の毒に思った主人公は、男に思いを遂げさせようとするが、男を呼ぶ大尽の「我は先へ帰れ。髪結人も待かねん」との声が聞こえ、自分の見立て通りの客であることが分かり、心変わりする。（主人公虚偽）（遊客身分の低さ露呈）

主人公は今後、野暮な男との浮名の立つのが嫌になり、そのまま起き別れる。(遊客帰宅・性の破綻)

○卷二の二・後半

主人公は自身が望む「帥なる男目」にたまたま逢うも、「女郎、帯とき給へ」とせかされる。主人公は「さてもせはしや。おふくろさまの腹に十月、よくも御入りました」と言葉を返す。(主人公虚偽)

すると男は、「此嫌ひ成女郎は、わるい物じや」と言う。主人公はこれに文句を言えば、男が「むつかしい事は御座らぬ。さらりといんでももらいまして、女郎かへて見ましょ」と言うことが見え透き(主人公身分の低さ露呈)、

身揚げが恐ろしく、「わけもない事あそばして、お敵さまへのもれての御申分は、こちはぞんじませぬ」と言い引き下がる。(主人公・性の破綻)

※前半のエピソードでは、主人公は無粋な遊客の身分の虚偽を見抜き、遊客は主人公の虚偽を見抜けずに遊興を終える。主人公と無粋な遊客の相反する人物像は、性(手管)の過剰と欠如のモチーフの出現とみるべきである。しかし、前半のエピソードにおける破綻の当事者は、主人公に拒絶された無粋な遊客(性の欠如)のみである。一方、後半のエピソードにおける虚偽と破綻の当事者は、粋な遊客(手管の過剰)に、困女郎の立場の弱さを見透かされた主人公(手管の欠如)である。前半と後半のエピソードには、手管という共通のモチーフが存在するが、それぞれのエピソードにおける破綻の当事者は、対立関係にある一方の人物のみであって、卷一の一における主人公と青侍のように、破綻の平等は表示されていない。

もっとも、巻二の二の前半と後半のエピソードでは、森氏が「同一章内」や「隣接する二章」、離れた「二話」(二章)のエピソードにおいて、「男女の力関係(加害、被害の関係・注日比野)がしばしば逆転」し、かつ、「男女の役割や行動パターンが交換可能」であると指摘するとおり、その逆転・交換関係が確認できる(前半、無料な遊客劣位―主人公優位・後半、料な遊客優位―主人公劣位)。

なお、森氏は、こうした男女の力関係を転倒させた二つのエピソードの出現について、「これらの話を同じ話型の反復と考えれば、登場人物の性差や年齢差はその話型に変化を与える要素にすぎず、ただ性の関係におけるありとあらゆる人物の組み合わせが追求されているだけである」と指摘する。けれども、数多く出現する男女の力関係を転倒させた二つのエピソードが何を表示するのか、といったところについては言及していない。ただし氏は、先にも取り上げたとおり、終章の大雲寺の場面をして、「死において強者も弱者も平等」と読み解く。さらに、巻二の一の遊女と遊客の零落のエピソードからも、破綻の平等を指摘し、「男女の加害―被害の関係は『一代女』のひとつの重要な側面だが、栄華と落魄(原文ママ・日比野)の運命は「みなく(女も男も)」も変るところはないのである」と述べている。

巻二の二が内包する二つの虚偽と破綻のエピソードの結末も、死という極端なものでないにせよ、性の破綻である。したがって、虚偽を軸に男と女、性の過剰と欠如の優位・劣位を転倒させた、二つの虚偽と破綻のエピソードは、モチーフの一つである性(過剰と欠如)の破綻の平等を表示するものである。

○巻六の一・前半)

客が内儀に、「めづらしいものはないか」と尋ねる。すると内儀は、「さる御牢人衆の娘」が手配できると作り話をする。(虚偽)

姿形を浪人の娘に作り替えた女は客の前に出ると、「小枝おどしといふ具足を、京へ染なをしにやらしやつた」と語り、無知をさらす。(知識の欠如・露呈)

「振袖は着ども、年は二十四、五ならぬ。是程の事はしるべき物をと、ふびんなり。」(性の破綻)

○卷六の一・後半

「正味八分の女、身持いやしく(中略)、是はかしらからしらせて、奈良芋も気がつきませぬ。客はなし、喰ねばひだるし(中略)といふ。聞くもいやなり。」(知識の過剰・暴露)

「此女も、客を勤めて、かなしうない事をないて(虚偽)、

路取置て、男は下帯もかかぬうちに立出、「御縁が御さらば、又もと、帰りさまに、花代といふも、せはしや。」(破綻)

※本章における主人公の立ち位置は、風俗の語り手である。後半のエピソードについては、虚偽、露呈、破綻の概念の出現順序こそ異なるが、暗物女(私娼)の「聞くもいやなり」という破綻した仕事ぶりが語られているように、定式に則った構成であると言える。本章では破綻の当事者である二人の「暗物女」の知識の欠如と過剰が対蹠をなしている。

以上、右に取り上げた三章で確認したとおり、長尾氏の指摘する「追放」(破綻)に繋がる「露呈」の主体と、

森氏が指摘する人物間の「対立」の要因には、「虚偽」が該当する。当該三章からエピソードの定式を抽出するならば、始章において性の過剰な追求と、その否定のモチーフが提出されているとおり、やはり、「虚偽」（性の過剰な追求・対立の発生）―「露呈」（暴露）―「破綻」（追放）といったところである。そして、エピソードの定式は全章において確認でき、巻一の一と同じく性を追求する二人（性の過剰と欠如）の破綻のエピソード、もしくは巻二の二のような登場人物の力関係（性の過剰と欠如）を逆転させたエピソードを併置することによって、モチーフの一端である性（過剰と欠如）の破綻の平等が表示されている。

四 モチーフの出現2

さきにも取り上げたが、森氏は男女の力関係の逆転（役割や行動パターンの交換）が「同一章内」だけでなく、共通性のある「二話」（二章）のエピソードにも確認できると指摘する。つまるところ、その「二話」（二章）における人物の力関係の逆転も、「同一章内」と同じく破綻の平等を表示するものである。参考までに氏が指摘する巻四の三と巻四の四の要点と、人物の力関係の逆転を見てみよう。

○巻四の三

奉公先から宿へと下る主人公の道案内をする「年がまへなる中間」は、主人公への恋心を隠し、「主命なれば、

御供つかまつりませねば」と語り、一見、誠実に振る舞う。(虚偽)

主人公は中間が「我がこやどの新橋へはつれゆか」ぬことから、恋心を見抜く。(露呈)(主人公・事実見抜く)

主人公は哀れみから中間と情事に及ぼうとするも、当人は「昔の剣今の薙刀、宝の山へ入ながら、むなしく帰る」と語り、性的不能をさらす。(中間・性の欠如)

○巻四の四

主人公は奉公先に向かう途中、その家の御隠居が多額の財産を持っていることを聞き、よそに男をつくり妊娠したら、「其親仁さまの子にかづけて、御隠居の跡を我が物に」することを企む。(虚偽)

主人公は家に到着すると、男性と想像していた御隠居が女性であったため、「かみさまへの奉公ならば、こまいもの」と後悔する。(露呈)(主人公・事実誤認)

御隠居は主人公に「同じ枕に寝よ」と言う。主人公は「是も主命なれば、いやとはいはず」言いつけ通りにする。すると御隠居は、「男になりて、夜もすがらの御調諺」、主人公は迷惑を被る。(御隠居・性の過剰)

巻四の三では、老人劣位(男・弱蔵・破綻の当事者)―主人公優位と設定されているが、一方、巻四の四では老人優位(女・強蔵)―主人公劣位(破綻の当事者)と設定されている。二章を比較すると、虚偽(性の過剰な追求)―露呈―破綻の定式を構成する老人と主人公の性力の強弱(過剰と欠如)が対称化されていると言える。当該エピソードの関係は、モチーフである性(過剰と欠如)の破綻の平等をよく表していると言ってよい。

なお、森氏は「隣接する二章」や、離れた「二話」(二章)のエピソードにおいて、人物の力関係の逆転(役割

や行動パターンの交換)を指摘するが、その出現位置におけるパターンの存在や、全容については言及していない。作品を見渡したところ、登場人物の力関係の逆転は、始草から終草に至る隣接する章に出現するようである。¹⁰ 加えて、巻一と巻二、巻二と巻三といった隣接する巻の、それも同数の章(巻一の一と巻二の一といった具合)や、巻一と巻六、巻二と巻五の同数の章にも出現するようである(もっとも、上記に該当しない位置にも出現を確認できる)。

そうした二章の対蹠点をいくつか見てみよう。

(1)隣接する二章

○巻一の一と巻一の二

- ・「去御方の青侍其身はいたなくて、いやらしき事なるに」(巻一の一)
- ・「其殿のうつくしき、今の大内にも誰かおよびがたし。」(巻一の二)

※主人公の年齢不相応な性欲が原因で、暮らしが破綻する点が共通している。その一方で、主人公の相手役の男性の容姿が「いやらしき」(巻一の一)、「うつくし」(巻一の二)と設定されているように対蹠をなしている。

○巻一の二と巻一の三

- ・殿の夜着よりしたに入て、其人をそそなかして、ひたもの恋のやめがたく、程なくしれて、さてもさても油断のならぬは都(巻一の一)

・主人公は「殿様」と「うれしく御枕をかはせ」す。しかし、「殿様」が次第にやせ細っていくと、「都の女のす

きなるゆへぞと、思ひの外にうたがはれ」る。(巻一の三)

※「都」出身の主人公が、「殿」との肉体関係を理由に現状の生活環境から追放される点が共通している。その追放理由の事実(巻一の二)と無実(巻一の三)が対処をなしている。

(2)隣接する巻の同数の章

○巻一の一と巻二の一

・初対面の客の容姿が「よ、ね、ぐ、る、ひ、の、風、儀」に見えないことを疑問に思った幫間が「おまへさまの傾城ぐるひなされますか」と問いかけると、「田舎大臣」は「此人が買れますと、革袋ひとつなげ出」す。その後、「田舎大臣」は通り掛かった主人公に興味を持つも、主人公が太夫から天神に降格したことを聞くと、「内証に悪き事のありやと、是非にかなはぬ取沙汰」をする。(巻二の一)

※巻一の一における主人公は、あまたの「美男」に求められながらも、「其身はいたなくて、いやらしい」という「青侍」を恋の相手に選ぶように、男性に対して優位な立場である。一方、巻二の二における主人公は、「よねぐるひの風儀にはあらず」という「田舎大臣」に、「是非にかなはぬ取沙汰」をされるように、男性に対して劣位な立場である。当該二章では、男性(容姿の欠如)に対する主人公の優位(巻一の一)と劣位(巻二の一)が対蹠をなしている。

○巻二の一と巻三の一

・「引舟・遣手気を付、それさまへ御状ひとつと、機嫌のよき折ふしを見あわせ」(巻二の一)

・家の「あるじ」が、「おぶく、まだかと、お文さまを持ちながら」尋ねると、主人公は「此お文はぬれの一通りで御入候か」と言葉を返し誘惑する。(巻三の二)

※破綻の当事者である主人公による手紙を男性の気を引く道具としての不利用(巻二の二)と利用(巻三の二)が対蹠をなしている。

(3) 巻一と巻六、巻二と巻五の同数の章

○巻一の一と巻六の一

・「自其時は十三なれば、人も見ゆるして、よもや、そんな事はと、おもはるこそおかしけれ。」(巻一の二)

・「振袖は着とも、年は二十四、五ならめ。是程の事はしるべき物をと、ふびんなり。」(巻六の二)

※破綻の当事者である主人公(巻一の二)と「暗物女」(巻六の一)の年齢不相応な知識(主人公・過剰、暗物女・欠如)が対蹠をなしている。

○巻二の一と巻五の一

・主人公は頼みをかけた三人の客のうち、ひとりには「檳榔子の買置して、家をうしな」い、またひとりには「狂言芝居の銀元にて、大分のそん」をし、もうひとりには「銀山にかかる所あしく」音信不通となる。その後、主人公は、「粟粒程なる物いつとなくなやまして、其跡見ぐるしく」なり、「人なを見捨ければ」鏡を見なくなる。

(巻二の二)

・「美形をとろひ」た主人公は、「広い京にもかくれなき分知大臣」に見初められ「おもはくの外なる仕合」を享

受する。大尽は主人公を「なを見捨給はずして、此勤めやめさせて」下屋敷に囲う。主人公はその出来事を「よき、目利のないかとおもはれし」と回想するとともに、「新茶入・新筆の絵をかづきながら、其家にてよき物になりぬ」と語る。(巻五の一)

※男性の目利きの誤りによる主人公の幸福・不幸が対蹠をなしている。

右のとおり、作品の随所に「性の過剰」と「性の欠如」の二項対立の構図(人物の力関係の逆転)が仕組まれている。破綻の平等のモチーフとは、作品の基本概念であると言ってよい。

五 主人公の職種

さて、本節では前出の広嶋氏が指摘する「異質な職歴と異質な主人公の行動・心象が交互に出現するという構想」の意義を検討する。

広嶋氏は「第一部」(非遊女期・奔放・明)と、「第二部」(遊女期・悲哀・暗)が各三章、第三部(非遊女期・奔放・明)が十章、第四部(遊女期・悲哀・暗)が七章、第五部(終章)が一章によって構成されていることに注目し、「主人公の「奔放」「悲哀」や気分の「明」「暗」が(中略)、非遊女期と遊女期とおよそ同数章ずつ一対になって登場し展開している」と指摘する。あらかじめ結論から述べてしまえば、氏の指摘する「奔放||明」である遊女期と、「悲哀||暗」である非遊女期が、「一対」になって登場するという構成は、作品のモチーフである性(過

剩と欠如)の破綻の平等を表示するものである。たとえば、氏はその存在に言及していないが、「一对」である第一部(非遊女期)と第二部(遊女期)のエピソードには、人気のモチーフが存在し、前者では主人公が他者から求められる(人気の過剩)、後者では主人公が他者を求める(人気の欠如)といった形で出現する。当該モチーフが読み取れる箇所を次に列挙する。

○第一部少女期・人気の過剩

- ・「我をしのぶ人、色作りて美男ならざるはなかりしに」(巻一の二)
- ・「我を見そめ給ひて、人伝をたのみ、めしよせられ」(巻一の二)
- ・「我を傳へ、聞て、小幡の里人より、住隠れし宇治にきて、我を迎えて帰り」(巻一の三)

○第二部公娼期・人気の欠如

- ・「すかぬ男には、身を売ながら身をまかせず、つらくあたり、むごくおもはせ勤めけるうちに、いつとなく、我を見はなし」(巻一の四)
- ・「淋しくなりては、人手代・鉦たたき・短足・兎口にかぎらず、あふをうれしく」(巻一の四)
- ・「きのふ迄嫌ひし男にあひ」(巻二の一)
- ・「我、女郎なれば逆、義理には身を捨る事、其座はさらじと、明暮思ひ極めしに、是程身のかなしきにも、相手なしには死れぬ物ぞ。」(巻二の二)

右のとおり、第一部と第二部のエピソードには、人気(人気・不人気)というモチーフが存在する。当該モチー

フが第三部に確認できないことからすると、第一部と第二部は広嶋氏が指摘するとおり、「一对」であると言える。エピソードの性質についても、第一部の主人公が他者から人気であるように「明」、第二部の主人公が不人気であるように「暗」であると言える。ただし、人気のモチーフを内包する第一部と第二部の各章における主人公は、エピソードの性質の「明」「暗」に関わらず、エピソードの定式の通り、破綻という結末を迎える。結末からすると、第一部と第二部に差異はない。したがって、人気のモチーフによって対称化された第一・二部のエピソードは、各章内部や二章における登場人物（性の過剰・欠如）の優位・劣位が対称化されたエピソードの出現の意義と同様、作品のモチーフである性（過剰と欠如）の破綻の平等を表示するものである。

一方、第三部・奉公人期「明」と、第四部・私娼期「暗」については、第一・二部と異なり、各部に独自の共通のモチーフと対称軸が存在し、内部でさらにエピソードの性質が明（過剰）・暗（欠如）に対称化され、性（過剰と欠如）の破綻の平等が表示されている。

第三部には情のモチーフが存在し、前半（巻二の三〜巻四の一）では欠如、後半（巻四の二〜巻四の四）では過剰という形で出現する。続く第四部と第五部（終章）には洞察力のモチーフが存在し、第四部の前半（巻五の一〜四）では欠如、その後半（巻六の一〜三）と第五部では過剰という形で出現する。以下に、第三部と第四部・第五部における当該モチーフが読み取れる箇所を列挙する。

○巻二の三〜巻四の一・情の欠如

・「うらみの日をつもるは、そなたは我をしられぬ事ながら」（巻二の三）

・「よき事させながら、あまり成言葉がため、にくし、さもしく、此広き都の町に、男日照はせまじ。」(卷二の四)

・「奥さまの用など尻に聞せ、後には、さらするたくみ、心ながらをそろしや。」(卷三の一)

・「こよひも亦、長蠟燭の立切まで、愔氣講あれかしと、進め給へば、忽に御・持よろしく」(卷三の二)

・「間もなく三人ながらたたきあげさせて、跡はしらぬ小哥ぶし、つらやつめたや、そのはづの事」(卷三の三)

・「影身に添て、万をくろめ見せざりしに、其程すぎて、筋なきりんきあそばし、我髪のをざとならず長くうるはしきをそねみ給ひ」(卷三の四)

・「自、幾所か替添して見およびしに、恋の外、さまざま心のはづかしき世間氣、いづれの人も替る事なし。」

(※夫婦の情愛の欠如)(卷四の一)

○卷四の一〜卷四の四・情の過剰

・「彼着物をとりに着するを、はや女手に入て、神ぞ情しりさまと、もたれかかれば」(卷四の二)

・「無理なる怨を申も、はや悪からず」(卷四の三)

・「其顔は悪さげなれども、やさしき心入、世間に鬼はなしと、嬉しく、耳をすまして聞に」(卷四の四)

※主人公が他者から恨まれる場合(卷二の三)や、情けを掛けられる場合(卷四の一)があれば、他者を恨む場合(卷二の四)や情けを掛ける場合(卷四の三)があるように、主人公と他者の感情の方向は一定でない。

○卷五の一〜四・洞察力の欠如

- ・「殊京都は、女自由なるに、我又あまらぬ事は、よき目利のないかとおもはれし。」(巻五の一)
- ・「鼻紙入より女郎の文出して、太夫が文章、どこやら格別と見せかくる。(中略)はしつぼねの吉野に書せたる文、見せらるるに^てから、犬に伽羅聞すごとく、ひとつも罅はあかず。」(巻五の二)
- ・「年は寄まじきものと、いとしきおもひながら、そこそこにあしらひ(中略)、恋慕の道おもひ切て、九月五日までの事をおもひしに、此親仁、つよ藏にして、夜もすがらすこしもまどろむ事もなく」(巻五の三)
- ・「けもない事を、お中にお子さまがやどり給ふなどいひてよろこび、てつきりと、男子には覺へあり。(中略)ひそかに重手代の、あたまにばかり知恵の有男を頼み、跡腹やまずに、仕切銀のうち二貫目出して、つくばはれける。」(巻五の四)

○巻六の一〜四・洞察力の過剰

- ・「京の石垣くづれなりと、さる御半人衆の娘御なりと、新町で天神して居た女郎の果なりと、おまへさまも見しらしやつて御ざんす事もと、跡形もなき作り物。それとは思ひながら」(巻六の一)
- ・「自、爰には勤めて、すぎにし上手を出して、帥ごかし颯、人の氣を取けれど、脇の小皺見出れ、若きを花と好る世なれば、後には問ふ人稀に、無首尾次第にかなし。」(巻六の二)
- ・「今時は、人もかしこくなりて(中略)、かりなる事にも吟味つよく、むかしと替り、是も悪女、年寄はつかま^ず、目明千人、めくらはなかりき。」(巻六の三)
- ・「是なる老女は、何をかなげきぬ。此羅漢の中に、其身より先立し一子、又は契夫に似たる形もありて、落涙

かと、いとやさしく問われて、殊更に恥かはし。」(巻六の四)

※第三部同様、主人公と他者間における見抜く・見誤るの關係は一定でない。

右のとおり、主人公の非遊女期(第一部・明)と遊女期(第二部・暗)、非遊女期内部(第三部・明)、遊女期内部(第四部・暗)と第五部(終章)というすべての枠において、「性の過剰」と「性の欠如」の破綻のエピソードを対称化することによって、作品のモチーフである性の破綻の平等が表示されている。すべての枠という点に注目すれば、作品世界では性の破綻が、職種、人生の明暗に関わらず、ことごとく平等なものとして取り扱われていると言える。

先にも取り上げたが、広嶋氏は主人公の非遊女期「明」と遊女期「暗」の二様のエピソードについて、「作者は主人公に職種と境遇にふさわしい「其時の心」と行動を取らせ、悲嘆させたり、大胆奔放な行動をさせたりしているにすぎない」と述べている。しかし、本節で確認したとおり、作者西鶴は主人公の「職種と境遇にふさわしい「其時の心」と行動」によって、二つの虚偽とその破綻のエピソードを対称化し、作品のモチーフである破綻(過剰と欠如)の平等を表示していたのである。

以上、『好色一代女』の世界では、一章の内部や、隣接する章・巻、主人公の年齢・職種に基づいた二つのエピソードにおいて、性の過剰と欠如のモチーフを可視化した二人の人物(強蔵―弱蔵、博識―無知、若―老、人氣―不人氣など)の虚偽(過剰な追求)と、その破綻によって、性の破綻の平等が表示されている。森氏が「性差による固定した階層的秩序は存在しない」と指摘するのとおり、作品を通読すれば、性を過剰なまでに追求する人物に優

位も劣位も存在しない。彼らにあるのは平等な破綻のみなのである。

では、結局のところ作品の随所に出現する性の破綻の不可避、平等のモチーフが何を映し出すのか、それを次に検討しよう。

六 主題

『好色一代女』の終章は老いを嘆く次の文から始まる。

万木眠れる山となつて、桜の梢も雪の夕暮とはなりぬ。是は明ぼの春待時節もあるぞかし。人計年をかさねて、何の楽しみなかりき。

右の文に注目した篠原進⁽¹⁾氏は、それを物語冒頭の正月七日の嵯峨野の風景と対照させ、主人公がその半生において得たものを次のとおり指摘する。

終章の「万木眠れる」寂寞たる冬景色（老いの風景）は、冒頭部に円環することで、華やかな正月風景（生誕の風景）へと一変するのだ。すなわち、一代女は自分の一生を四季の移り変わりと同じように静かにながめていたのであり、悔いてはいないのである。ただ、そこには全力疾走した後の空しさだけがある。

氏は続けて、主人公の半生を「反道徳的」とするとし、「何の制約もなしに、自由奔放に生きることの空しさ、これこそが『一代女』の主題だ」と述べる。

筆者も、物語の主題と、主人公がその半生において得たものが「空しさ」であるとする氏の指摘に賛成したい。それは、虚偽とその破綻（性の過剰な追求と、その否定）という作品のモチーフから主人公の半生を追った場合も、同様の結論にたどり着くからである。なお、森氏も、篠原氏の「空しさ」が主題であるという指摘を論考の中で取り上げているが、二項対立の主体を男女と想定し作品の分析を進めた自論の結論との関連については言及していない。

篠原氏が主人公の言動を「奔放」と評すように、主人公が自己の人生において優先するものは、安息や安定ではない。彼女が優先するものは、性の追求であって、むしろそれを優先するあまり安息や安定を自ら放棄する。

ときに主人公は「ならぬ時には元の木阿弥」（巻五の一）と語るとおり、生活苦のためやむをえず性を売る場合もある。けれども、扇屋の内儀となりながらも客に恋心を持ち、それが原因で追放される（巻五の三）。主人公は幾度も苦境からの脱出の機会がありながらも、そのたびにそれを自らふいにする。やはり、主人公は性を追い求めるあまり、自ら安息や安定を放棄しているのであって、過去の失敗に学ぶといったことがない人物なのである。こうした主人公の人間性は、虚偽と破綻のエピソードの定式が存在がよく表している。

ところが、性に「奔放」な主人公も、物語終盤、巻六の三・四において自己の性力に限界が近づくと、過去を振り返るといような心境の変化をみせる。

巻六の三では、かつて性欲を満たすがために自己の美貌を活用してきた主人公も、六十五歳となり自己の人生を悲観する。そして今までに様々な情事を体験してきたことを思い出していると、眼前にかつて墮胎した九十五、六

もの子どもの亡霊が出現する。主人公は「無事にそだて見ば、和田の一門より多くてめでたかるべき物を」と過ぎ去った過去を懐かしみ、亡霊が消えるといよいよ死を決心する。しかし結局、命を捨てることが出来ず、「喰で死るかなしきよりは」という理由から惣嫁となるが、老いた主人公は、もはや一人も客を取ることが出来ず、「これを浮世の色勤めのおさめ」とする。

続く巻六の四では、「せめては、後の世の願ひこそ真言なれ」と思うに至った主人公は、大雲寺へ参詣し、「殊勝」な心持ちとなり、かつて関係を持った男たちの死という現実を認識する。そして、「さて、勤めの女程、我身ながらをそろしきものはなし。一生の男、数、万人にあまり、身はひとつを今に、世に長生の恥なれや、あさましや」と懺悔する。

物語終盤の巻六の三・四において性力の限界を感じた主人公は、自身の子と伴侶という親しい人物の亡失の過去を振り返る。これが意味するところは、安息、安定を放棄してまで性を追い求め、それを手にするための虚偽と、その破綻を繰り返してきた主人公には、自己の生命以外、結局、何も残らなかつたということである。

西鶴は、人心の有り様について『日本永代蔵』の冒頭で、「人は実あつて、偽りおほし、其心は本虚にして、物に依じて跡なし」と述べている。この言葉のごとく、時には周囲に影響され、また時にはやむを得ない事情により性を追い求めてきた主人公が、自己の性力が限界に達したことによって気づき得たことは、やはり、篠原氏が指摘するとおり「空しさ」以外にない（「虚偽」という言葉が作中に登場することを踏まえれば虚しさ、虚無と言ったほうがより適当だろう）。

そして、主人公が過去を語り終えると、物語は次の言葉を最後に幕を閉じる。

よしよし、是も懺悔に身の曇晴て、心の月の清く、春の夜の慰み人、我は一代女なれば、何をか隠して益なしと、胸の蓮華ひらけてしばむまでの身の事、たとへ流れを立たればとて、心は濁りぬべきや

右の発言には、かつての主人公にあった虚無感など到底感じられない。主人公は、性の過剰な追求という偽りに満ちた過去を包み隠さず告白したからこそ、その精神は曇りが晴れ、清らかなものとなったのである。「たとへ流れを立たればとて、心は濁りぬべきや」という感情溢れる言葉は、性を追い求めた先に、虚しさしか存在しないことを身をもって知る主人公であるからこそ、発せられたものなのである。

以上、主人公の回想の随所で見られる相対する様々な人物（性の過剰と欠如）の「虚偽」（性の過剰な追求）の行き着く先が、いずれも破綻であるように、二項対立の構造が映し出すものとは、性を追い求めることの虚しさであったのである。

おわりに

本稿では、長尾氏が指摘し、森氏が発展させた『好色一代女』における二項対立の構造に注目し、それが映し出すものは何かを検討してきた。

主人公はその半生において、ひたすら性を追い求め、他者を巻き込み、ときには性を追求する他者に巻き込まれ、

破綻を繰り返す。このエピソードの定式と、二項対立の構造が映し出すものとは、特定階層の性の優位や劣位ではない。誰しも性の破綻を免れることができないという紛うことなき現実であって、性を追求することの虚しさなのである。そして、二項対立の構造は、作品の全編、それも一章の内部、隣接する章・巻、巻一と巻六といった作品の前半と後半、職種に基づいた位置に設置されている。この綿密な構造は、性を追求することの虚しさが、『好色一代女』の主題であることを示している。

従来、本書は主人公の「さまざまになりかはりし事」に注目し、様々な読み試みられてきた。しかし、そうした様々な読みを可能にさせる種々のエピソードの行き着く先が、いずれも性の破綻であるように、主人公の年齢、職種、喜怒哀楽といった表面上の差異とは裏腹に、本書は性の過剰な追求と、その否定（「虚偽」とその破綻）という一つのモチーフによって構成されていたのである。

注

- (1) 本文の引用は、麻生磯次・富士昭雄『決定版対訳西鶴全集』（明治書院）に拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。また、他の西鶴作品についても同書に拠った。
- (2) 暉峻康隆『西鶴―評論と研究 上』（中央公論社、一九五三年）
- (3) 谷脇理史『好色一代女 試論（上）―そのしたたかな生と性―』（『文学』一九八五年七月）のち、同名論文（下）『文学』一九八五年一〇月）とともに、同氏『浮世の認識者井原西鶴 日本の作家25』所収、新典社、一九八七年）引用は後者による。
- (4) 長尾三知生『好色一代女』における語りの定式（『西鶴の出発』所収、私家版、一九八八年）本論文における長尾氏

の論文の引用は、すべて同書による。

- (5) 森耕一『好色一代女』の〈女〉—性差をめぐる物語—(『園田国文』一三号、一九九二年三月)のち、同氏『西鶴論 性愛と金のダイナミズム』所収(おうふう、二〇〇四年) 引用は後者による。本論文における森氏の論文の引用は、断りがない限り同書による。

(6) 注3同論文

- (7) 広嶋進『好色一代女』の悲哀と滑稽—暎峻康隆氏説の矛盾を巡って—(『清心語文』四、二〇〇二年八月)のち、同氏『西鶴新解 色恋と武道の世界』所収(ベリかん社、二〇〇九年) 引用は後者による。

- (8) 主人公が就く職種に注目し、各章を区分したのは、浮橋康彦氏である(『好色一代女』構造上の諸問題『新潟大学教育学部紀要』一三号、一九七二年三月)。広嶋氏は浮橋氏の区分に則り、エピソードの性質を分析した。

- (9) 『好色一代女』卷三・四の意味—女奉公人一代女の役割—(園田国文一五号、一九九四年三月)のち、注5同書所収。
- (10) 浮橋氏は、主人公が卷三の二で「出家に成程のおもひ」と語る点、卷三の三で「今惜き黒髪を剃て」という点、卷三の四の主人公が「我いつとなく人の形振を見ならひ」髪結女になるという点に注目し、「俳諧的な連想の連接が感じられる」と指摘する(注9同論文)。森氏は、卷三の一・二・四において「これら三語に共通するのは、妻の側の何らかの欠如である。卷三の一の妻は、強威の夫に対して相対的に性的能力が欠如(中略)。卷三の二の妻は夫が妾を寵愛したために性の欠如、この卷三の四の妻は、髪の欠如の弱点ゆえに夫の「夜ふけての御かへり」(浮気)を強く非難できない」と指摘する(注9同論文)。

- (11) 篠原進『好色一代女』と小町伝説—(『弘学大語文』十一号、一九八五年三月)のち『日本文学研究大成 西鶴』(国書刊行会、一九八九年)所収

(12) 注5同論文